

## 序 章

# 階級の根源へ

塩 田 光 喜

私がパプアニューギニア高地のインボン族のもとでフィールドワークを始めて以来、17年の歳月を閲した。その間に多数の男女の人生の生の軌跡（時には死）を見てきた。そして、この数年のことである。インボン族の間に階級が発生したと実感したのは。

かつて「俺達は皆平等なのだ」「チャンスさえつかめば州知事にも、国会議員にもなれるのだ」という覇気に溢れていた青年達も今や壮年から中年にさしかかり、多くの者が「俺達の人生は失敗だったのではないか」と考え始めている一方で、少数の者は経済的な、あるいは政治的な成功を収め、更に上を目指して精励している。かつての競争的平等主義が社会を覆っていた中から階級分化が発生していると私の目には映じてきたのであった。実際、IMFの推計で、これはパプアニューギニア全体での数字となるが、国際的貧困線（一日一人あたりの生計費1ドル）以下の人口が総人口の30%を占めているという貧窮化の急激な進行が確認される一方で（塩田 [2002: 12]）、元首相のピアス・ウィンティが（オーストラリア・ニュージーランドを除く）南太平洋諸国随一の富豪になったといわれている。こうした数字や言説は私の実感を裏付けるものと言ってよいであろう。

そうした時に、パプアニューギニア・セピック地方のチャンブリ族の古参研究者であるデボラ・ゲワーツとフレデリック・エリントンの共著で『パプアニューギニアにおける出現しつつある階級』という本が1999年に出版され

た (Gewertz and Errington [1999])。この本の主題は東セピック州の州庁所在地ウイワック (Wewak) における中流階級 (middle class) とグラスルーツ (grassroots) と呼ばれる下層階級との差異とヘゲモニー関係をめぐりものであるが、同じパプアニューギニア研究者が全く異なる地域でそれぞれ独立にパプアニューギニアにおける階級の形成を社会変動の中心現象として見て取ったことはパプアニューギニアにおける階級化の問題が全国的現象として広がっていることを示唆するものであろう。

ゲワーツとエリントンのセピック地域は約100年、私のインボング族は約50年前に文明史が始まった。それ以前は、平等主義的エートスの支配する新石器的部族社会であった。すなわち、我々は階級の原初的発生場に立ち会っているのである。「階級の発生」という問題が社会科学において占める意味の大きさは何人も首肯されることであろう。階級とは何であるのか、それはいかなるプロセスを経て生まれてくるのか、そしてそれは社会をどのように変えてゆくのかといった問題は社会科学における基本問題の一つである。それが今まさに眼前で展開されているのである。この根源的問題を考察する場として、古くとも百数十年前までにしか遡ることのない文明の歴史の浅い太平洋島嶼諸国をフィールドとして調査研究を行っている研究者達が集まって調査と思索と討論を経て成立したのが本書である。

伝統的階層社会に関する人類学的研究はオセアニア研究の中心的柱の一つであったリーダーシップ論の中で、とりわけ王制や首長制をもつポリネシアの島々やマイクロネシアの一部で、研究の主要テーマとして調査・研究され、1950年代にはレイモンド・ファースやアーヴィング・ゴールドマンやマーシャル・サーリンズらによって豊かな民族誌記述や理論的結実となって今日に至っても参照される古典的業績が出版されている (Firth [1950], Goldman [1957], Sahlins [1958])。

だが、我々が行おうとしているのは近代的階級の文化人類学的研究である。白川論文に述べられているように、南太平洋島嶼諸国が1962年の西サモア独立から始まって、(ハワイやフランスの海外領を除く) 1980年代に至るまでに

太平洋の島嶼のほとんどすべてが、軍事・外交権を持たず、内政自治権のみを保有するという形（例えば、クック諸島やマイクロネシア連邦）をも含めて、独立を果たすとともに、かつての統治者であった白人の地位を現地エリートが代替するようになるにつれて、広くは政治経済学（ポリティカル・エコノミー）、狭くはマルクス主義者達の間から新興島嶼諸国における近代的階級分化について論ぜられるようになってきた。人類学者の中からも、キージグ（Keesing [1996]）やハウオファ（Hau'ofa [1987]）らマルクス主義系の人類学者が富裕なエリートと貧しい人々の間に階級分化の徴を認め、それをオセアニアに適用しようとする動きが1980年代頃見られたが、ベルリンの壁崩壊以後の社会主義諸国の消滅は理論的枠組みとしてのマルクス主義の没落をももたらし、その中心概念である「階級」についても論究されることが稀になった。その中で、わずかにピエール・ブルデューがその主著『ディスタンクシオン』（ブルデュー [1990]）をはじめとして「階級」を主眼においた理論構築を進めていたが、彼の場合「階級」概念はマルクスの「生産手段の所有関係」に基づく階級概念とは大きく意味を異にし、むしろ西欧社会の日常語の中に根付いた階級（例えば上流階級、中流階級、下層階級といった）観念を彫琢したものである。そこにおいては職業、地位、ライフスタイル、意識や知覚や身体技法（例えば、テーブル・マナーのような）、ファッション、趣味といった人々の優劣を秩序付ける諸要素を精密に組み合わせ、西洋社会の構成原理に迫ろうと試みられる。彼自身、『実践感覚』（ブルデュー [1988]）の中で言及しているように、彼の「階級」理論はブルーストの『失われた時を求めて』（ブルースト [1984-89]）を代表とする西欧階級文学の豊穡な知的・美的土壌の中から生まれた理論的試行である。ブルデューのこの試みはマルクス主義のドグマ化された「階級」概念とそれを用いた定型化された分析から階級概念を救い出し、柔軟で微細な記述と認識をもたらすことに成功したが、他方、マルクス自身が『資本論』（マルクス [1969]）や『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』（マルクス [1971]）で示したような、ダイナミズムを失ったことも否定しがたい。

こうしたブルデュー的階級概念を援用してパプアニューギニアの地方都市における「階級」関係の現在を人類学的フィールドワークと「厚い記述」によって描き出したゲワーツ・エリントンにもブルデュー的長所と欠点が現れている<sup>(1)</sup>。

ゲワーツ・エリントンはウィワック住民をミドル・クラス（中流階級）とグラスルーツ（草の根）という二つの集団に分けるが、そうしたミドル・クラスやグラスルーツがいかにして形成され、そしてそれがどのようなメカニズムを通して自分達の生活状況を維持しているのかについてはほとんど言及されない。両者の分化は既定の事実（fait accompli）として前提され、二項対立的に固定されたものとして論じられている。だが、興亡定かならず、板子一枚下は地獄のパプアニューギニアのビジネスマン達を見慣れている私にはこの静態的構図は信じ難いものがある。彼らがウィワックのミドル・クラスの焦点を成すとして詳述しているロータリークラブのメンバーも外科医、銀行支店長、中学校長、インターナショナル・スクールの校長、州政府の青年局長、そしてただ一人だけが商店主なのである。この顔ぶれはウェーバーなら地位集団と呼び、階級の名称は与えないであろう。商店主を除き、他の5名は専門家や高級官僚、近代的組織の長といった、パレートならエリートと呼ぶ人々であり、自ら資本主義経済の中に己の資本と才覚を投じて、利潤を勝ち取り、資本を蓄積するタイプの人間ではない。

ゲワーツ・エリントンの記述と分析は教育エリートとグラスルーツの分化と教育エリートのヘゲモニーを扱ったものであり<sup>(2)</sup>、その意味では実はキーピングやハウオフアらの富裕なエリート対貧しい人々という形での階級定式と同一線上にあるものなのである。

そこで、捨象されてしまうのは資本主義システムという要素である。

しかし、富裕なエリート「階級」が存在できるのもウォーラーステインのいうところの世界経済システムの上に太平洋島嶼諸国が乗っているからである（ウォーラーステイン [1987]）。

ただし、風間論文が指摘するように、太平洋島嶼諸国はパプアニューギニ

アとフィジーを除けば、人口も小さく、資源にも恵まれず、旧宗主国からの援助によって国家経済を成り立たせている国がそのほとんどすべてを占める。ウォラストインの定式化とは反対に、中核国による周辺国の経済的搾取ではなく、中核国による周辺国への貨幣の贈与という事態が成立しているのである。これをオセアニア研究においてはMIRAB型経済（MI: 移民, R: 送金, A: 援助, B: 官僚制）と呼んできた（Bertram and Watters [1985] 参照）。島嶼によって偏差はあるが、旧宗主国からの援助によって国家機構が維持されるという点に関しては共通である。この旧宗主国からの援助によって国家機構＝官僚制は維持され、それを運営するものとして地元出身の教育エリートが充当されているのである。いわば、太平洋の小島嶼国の圧倒的多数は旧宗主国にその経済的基盤を依存する寄生国家であり、その中において高給を得る教育エリートは旧宗主国に対する寄生集団なのである。すなわち、世界資本主義システム内部における寄生集団がキージングやハウオフアのいう支配階級なのである。こうした寄生集団を中核国（アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド）が維持していくのは、一つには現代においては植民地という政治形態が許されず、地表面は全て主権国家によって覆われねばならぬという政治的至上命令が貫徹されているため、もう一方では旧植民地への援助を通して中核国は自らの地域的影響力を保持せんがためである。そのため、アメリカはミクロネシア連邦に、オーストラリアはヴァヌアツに、ニュージーランドはトンガに援助を与え続けるのである。その結果、トンガは援助がGNPの30.2%、ヴァヌアツは31.9%、キリバスに至っては46.5%にまで達するのである（佐藤 [1997: 346]）。そして、その多くは近代国家の体裁を維持するためにそれらの国々の官僚機構の中に流れていくのである。このように、大半の島嶼諸国は先進国に搾取されるどころか、先進国からの、島嶼諸国にとっては巨額な援助によって、国家として存立しているのである。政治・官僚機構の中核に位置し、そうした援助を配分する権利を持ち、また、自らも近代的で富裕な生活を営む政治・行政エリートはそうした意味で、先進国に寄生する存在なのであり、また、その恩恵を受ける村人達も先進国からの援助に

寄生する存在なのである。こうして、大半の島嶼諸国においては、政治・行政エリートは民衆から搾取する存在ではなく、先進国からの援助を（自分達をも含めて）配分し、国際社会と国内社会、近代世界と伝統世界を接合する媒介者なのである。そうした彼らを「階級」と呼ぶことができるとするなら、それはマルクス主義の意味においてではなく、ブルデューの意味においてであると、我々は結論づけた。白川論文が描いたのはそうした官僚機構の中のエリート達がいかにして収入を獲得し、ライフスタイルを享受し、それを教育を通じて子女の世代に継承しているかについての具体的なデータを豊富に踏まえながらの貴重なスケッチである。そこにおいて見られるのは初代エリート達が国家機構に寄生しながら、高所得と富裕な生活を手にし、それを自らの子女に継承させようと努めているという現実である。白川はしかし、そうしたエリート層がアイデンティティをエスニック・グループに置き、社交集団を形成しているという理由で階級という名称を否認する。だが、ウェーバーはすでにこのような議論が現れるのを予見したかのように、階級がエスニック・グループのようなアイデンティティ準拠集団であるということを否定して、「階級そのものは集団〔共同体＝ゲマインシャフト—訳者〕ではない」と釘を刺している（ヴェーバー [1954: 222]）。その場合、階級とは分業協業体系において位置と利害を共有しさえすればいいのであり、その成員が自らの階級にアイデンティティを持ち、ロータリークラブやゴルフクラブといった社交集団を作る必要は全くないのである。こうして、白川はゲワーツ・エリントンを批判しながらも、その議論の土俵はゲワーツ・エリントンと同じ、ブルデュー型「階級」概念に乗っているのである。

このように、オセアニアの階級分析者がブルデュー型「階級」概念を意識的であれ、無意識的であれ、選択してしまうのはなぜかといえば、援助と官僚制で成立している教育エリート層を「支配階級」（キージングやハウオフア）や「中流階級」（ゲワーツ・エリントン）と同一視してしまうからである。白川論文の9人の主人公の大半が官僚、国際官僚、元官僚で占められているのも同一の機序による。その根本はMIRAB型経済、特に援助と官僚制の結合

による政体の形成という寄生的政治経済の構造による。それが静態的・ブルデュー型「階級」概念をとらせてしまった所以である。そこには資本主義が生み出す社会のダイナミズムが欠けている。ウォーラステインが喝破したように、資本家とは「静止している現象ではない。それは、絶え間ない差異形成の過程にある。したがって、形態と構成が常に変動しつつある一階級の名称なのである」(ウォーラステイン [1987: 169])。

それでは、オセアニアにおいて「個人がどのようにしてブルジョワになり、ブルジョワであり、そしてブルジョワでなくなるのか？」という問いに答えようと志したのが、風間、大谷、塩田の諸論文である。この3名のうち、大谷、風間は資本家たることをめざす人間達を疎外し、失墜させる社会のあり方を、塩田は資本家を勃興させ、彼らが社会をリードするあり方を描いている点において対照的である。その差異を解き明かす鍵は贈与と交換（あるいはカール・ポランニーの語法を用いるならば、互酬性）のあり方にある。とりわけ、風間の描くキリバス共和国の離島の村の日常生活の隅々にまで浸み込んだ懇請 (bubuti) の慣行と、塩田のフィールド、パプアニューギニア高地・インボン族における共同体間の卓越と同盟を求めての儀礼的贈与と交換、マガリ (生きたブタと貨幣の大量贈与) やピッグ・キル (ブタ屠りの儀) との間に横たわる贈与と交換のあり方の違いは対極に位置するといつてよい。キリバスの懇請は日常生活における物資の平準化を促すのに対し、インボン族のマガリは非日常的祭儀の場に画限された贈与と交換であり、「相手に勝つため、優越するために催され、名声や声望を得るために行われ、常に二つのグループが対立し、しかもそれが同時に敵愾心と協力の精神によって結びつけられる」(ホイジンガ [1973: 137])。そのために、日常は各世帯の妻達がサツマイモの栽培と、ブタの飼育、コーヒー栽培にあたり、財の形態としてのブタと貨幣の蓄積に励む。そして、それは私有財産として、各世帯 (処分権者は家長としての夫) に帰属する。それに対し、キリバスの懇請慣行の原理は「余剰の物資、今現在使っていない道具、あるいは人の持つ技術は現時点で必要とする人に与えられるべき」であり、「貸与された者は返済の義務を必ずしも負わない」。

「持てる者」，例えば国会議員は「ラジオカセット，バケツ，シャツ，食料品，さらには自転車まで懇請の対象となり，懇請で給料のほとんどを使い果たしてしまう」とその妻がいうほどに，財や貨幣の蓄積をわずかばかりも許さぬほど懇請の原理は厳しく貫徹する。

こうした互酬のあり方の相違に応じて，キリバスとインボング族の間では平等性の概念も異なる。

キリバスにおける平等性は結果の平等である。そこにおいては，他者と異なる目立った企てを行い，極度に突出する者は妬まれ，抑圧を共同体全体から受ける。そこでは文字通り皆が同一であることが理念となるのである。それに対して，インボング族も男達は皆，根本的には「俺は誰とも平等だ」と思っているが，同時に財力や弁論，そして対外交渉能力を主軸とする共同体におけるリーダーシップ，共同体を越えた名声や威信をめぐるゲームにおいても勝利したいと熱望している。ホイジンガの言葉を借りれば，「自分が優越者であることは証明されること」（ホイジンガ [1973: 119]）を望む競争的平等主義なのである。このような平等主義において要求されるのは，結果の平等ではなく，チャンスの平等である。人生というゲームにおける勝利＝卓越が男達の野心の的なのである。ただし，卓越者も他者に権力を揮いたいわけではなく，また他者とは根本的に異なる存在として自らをみなしているわけでもなく，プリムス・インテル・パレス（同輩者中の第一人者）であるという意識は失わない。再び，ホイジンガを借用するなら，「根源的なのは他人よりも抜きんでたいという欲望であり，第一人者になりたい，第一人者として尊敬をうけたいという願望なのである」（ホイジンガ [1973: 119]）。

こうしたキリバスの，個人の突出を許さぬ平等主義エートスとインボング族の第一人者としての名誉を求めて競い合う平等主義的エートスは近代化に伴って階級形成の成否に大きな影響を及ぼすであろうことは言うまでもないだろう。

キリバスの離島における個人商店設立の試みは最初は首都からの物資途絶と飢餓という経験を経た島民に物資の供給源として許容され順調にいくが，



やがて懇請慣行の延長線上にある掛売や個人商店の高価格・貨幣の蓄積に対する共同体全体の対抗措置として首都の卸売会社を誘致されたことによってすべて潰されていった。日常互酬慣行である懇請と個人の突出を許さぬ厳しい平等主義エートスにより、資本主義の萌芽であった個人商店は全滅したのである。

同様の状況は、トンガにおいても見られる。そこにおいても、商店を起こそうとする者の企図を挫くものは掛売として現れる互酬慣行である。

すなわち、「持てる者」は「持たざる者」へ物を惜しみなく与えねばならぬという、マーシャル・サーリンズというところの「一般的互酬性」が資本蓄積の可能性を潰すという現象が太平洋の島嶼諸国における階級分解を阻止しているのである（サーリンズ [1984: 232-233]）。

それに対して、インボング族における資本家階級（ビジネスマン）の勃興はこの社会が伝統的に持っていた能力に基づく競争的平等主義のエートスと贈与交換（互酬性）の形態が共同体内の「持てる者」から「持たざる者」へという一般的互酬性ではなく、共同体間の優劣の競争と友好関係の強化を目指して行われる祭儀活動に限定されたものであったことと結びついている。ホイジンガはダヴィを援用して、こうした共同体間の互酬交換の体系を「財産、地位、名声が賭けや挑みの結果として絶えず人手から人手へ渡ってゆく大きな賭博場」（ホイジンガ [1973: 141]）に見立てるが、この世界から株式取引場へは市場経済システムを媒介させると一歩で接合することができよう。実際、ホイジンガによれば、株式取引は直訳すれば「株式市場で遊ぶ」（ホイジンガ [1973: 124]）ということであり、それは「賭け場から発生してきたものである」（ホイジンガ [1973: 125]）。このことはマルクスにおいても貨幣の資本への転化の章において、「投機の流通形態は賭博と共通である」というコーベットの、更にはマカロックの「売るために買うことは投機であり、したがってまた投機と商業との差異はなくなる」との発見に繋がってゆき、最終的に「ある一人が生産物を再び売るために買う一切の取引は事実上投機である」という結論に導かれてゆく（マルクス [1969: 262-263]）。それこそが

インボン族の競合的互酬性から資本主義への転回に際して起こった出来事の内的論理なのである。そうして、こうした内的論理転換を生起せしめることができた男達が「ビジネスマン」という新興階級を形成してゆくのである。

このようにして、パプアニューギニアでは資本主義とそれに伴う階級が生起していったが、パプアニューギニアと並んで太平洋島嶼諸国中で資本主義経済を成立させえたもう一つの国がフィジーである。ただ、パプアニューギニアとフィジーが異なる点はフィジーの資本主義がその身に帯びている民族性である。旧宗主国イギリスの統治政策のもとでマタンガリと呼ばれる伝統的土地所有集団に土地所有権を保障されたフィジー人に対し、土地所有権を持たぬ代わりに、植民地時代に砂糖プランテーション労働者としてインドから連れて来られたインド系フィジー人は次々に商業・流通方面に進出し、商業資本家層を形成していった。とりわけ、本国でも商業に長けたグジャラティ系およびムスリム系インド人が白人系企業とともに商業・流過程を二分し、土地所有者としてのフィジー人と拮抗した (Robertson and Tamanisau [1988: 5])。こうして、フィジー人の土地所有とインド系フィジー人の貨幣所有という図式が創られた。だが、土地、貨幣のいずれも持たぬ「土地なしの社会的弱者」「低賃金労働者」のレッテルを貼られ、フィジー人、インド系フィジー人という二大民族集団 (エスニック・グループ) の間に沈み込んでしまったエスノ＝クラス (民族＝階級) としてのソロモン諸島系フィジー人が存在する。ソロモン諸島系フィジー人を論ずる関根はソロモン諸島中のマライタ島民のユダヤ起源説に触れ、マックス・ウェーバー呼ぶところのパーリア・folkによって形成される意識形態を析出する。国際的労働力移動が激化している中で、ドイツにおけるトルコ人問題やフランスにおけるアラブ系住民のように、民族がそのまま社会の中で階級を構成するエスノ＝クラスという集団のあり方、そしてアイデンティティ準拠集団 (それが階級であれ、エスニック・グループであれ) が身にまとう自己規定としての意識形態の問題はオセアニアという文脈を超えて、階級を見てゆく上でますます重要性を帯びつつある問題と言えよう。

更に、関根によれば、「一般に南太平洋地域では伝統的土地権を持たない個人や集団は政治的に自己を主張する立場になく、社会的に低い地位に位置づけられる傾向にある」と言う。

この命題をめぐって、「資本家と労働者」といった枠組みとは異なった「地主と借地人」といったパースペクティブから、大谷と柄木田がそれぞれのフィールド経験に依拠しながら、太平洋の近代における階級のあり方を論じている。

柄木田はヤップ諸島における本島と離島の伝統的階層（階級ではない！）関係と近代化に伴いヤップ本島に出現した都市への離島からの住民と都市の伝統的土地所有者の関係のずれを問題にした。近代的都市への村落地域からの人間の移入は太平洋の至る所において、セトルメント（占拠地）と呼ばれる集落を生み出してきた。ヤップ諸島においては本島と離島との間の伝統的朝貢関係に基づいて、離島住民は本島の首長村落に一時滞在することが許されていた。だが、州都コロニアが首長村落と離れた土地に建設されると、コロニアにおける雇用やサービスを求める離島住民はコロニア周辺に居住地を求めていった。そこで生起してきたのが、伝統的地権者と移入住民との間の土地をめぐる貨幣経済を媒介とした「地主・借地人」関係の成立であった。こうした「地主・借地人」関係はパプアニューギニアのポートモレスビー、フィジーのスヴァ、ヴァヌアツのポートヴィラ等太平洋の至る所で見られ、地主側も借地人側もアイデンティティ準拠集団となっているところに太平洋独自の「地主・借地人」関係のあり方が見られる。すなわち、「地主」側も、「借地人」側も伝統的民族、部族、島民からなり、そうした伝統的集団が土地をめぐる、貨幣関係を介在させた「地主・借地人」という構造を創り上げるのである。ただ、キリバスと同様、ここにおいても、貨幣は贈与交換の回路へと回収されるのであるが。

こうした「地主・借地人」関係を都市における単なる居住関係にとどまらず、土地所有関係に基づく領主・農民関係で全土を覆い尽くしたのが、トンガ王国である。白人接触以前のトンガにおいては親族集団Ha'aが己が土地

をそれぞれ占有していた。ところが、白人西洋文明との接触から、大内乱時代を経て、現王朝の始祖トゥポウ1世が全土を立憲君主政体として統一するまで（19世紀後半）に、親族集団Ha'aの占有状態は破れ、王の任命した貴族＝領主階級とそれに地代を納める農民階級という階級関係に転換されてしまい、それが今日まで続いている。

太平洋の島々が最初に遭遇し、今日もその圧倒的影響下に置かれている文明は西洋近代文明である。アジアの諸文明、諸宗教は太平洋の島々に及ぶことはなかった。その結果、太平洋の島嶼国・地域は文明史的には西洋近代文明の枝文明となった。宗教的には、キリスト教によって広く覆われ、学校教育の言語は英語ないしはフランス語で行われ、国家の歴史は白人文明との接触を遡ることがなく、太平洋では最も古いポリネシアの島嶼国も西洋流立憲君主制としてスタートした。そして、白人到来以前にはいずれの島々も金属器を知らず、程度の差はあれ、新石器の物質文化の中で暮らしていたのである。太平洋の島々が最初に触れた文明的テクノロジーは全て白人西洋近代文明によってもたらされたのである。

この西洋近代文明と新石器の文化の衝突と結合という点にこそ、現在も生成過程にある太平洋島嶼文明の特性がある。文明史と言えば、想起されるのはマルクスとエンゲルスが1848年に著したマニフェスト『共産党宣言』の「全ての歴史は階級闘争の歴史である」という名高い一文であるが、後に文化人類学の始祖の一人ルイス・ヘンリー・モーガンの著作（モーガン [1958]）を学んだエンゲルスは「全ての歴史」を「全ての書かれた歴史」へと訂正を加えた（マルクス＝エンゲルス [1951: 33]）。

事実、西洋近代文明との接触以前には、大谷も言うように、王権を抱き、太平洋で最も成層化（王－首長－平民）の進んだトンガですら、マルクス的な意味における階級、すなわち「生産手段の所有関係による搾取・被搾取関係」の意味における階級は存在していなかったのである。無論、ソースタイン・ヴェブレンの「有閑階級」という意味における「階級」は存在していた

が（ヴェブレン [1998] 参照）。

本論冒頭でも申し上げたように、「階級」というタームはプリズムのようにどの面にどの角度から光を当てるかによって写像は様々に異なって見える。

本書においても、論者達が各々のフィールドで体験した事象によって様々な階級概念が援用され、それに応じて多様な階級像が描かれていく。パプアニューギニア高地のビジネス成功者階級、ヴァヌアツの援助寄生集団としての官僚階級、ソロモン諸島系フィジー人達のエスノ・クラス、ヤップ諸島における離島から本島都市への移住借地人階級、トンガにおける領主階級と農民階級の分裂、キリバスにおける階級の不在など、マルクス主義の没落は階級概念の無効をもたらしたのではなく、逆に、階級概念の多様化・豊穡化を可能としてくれた。こうして、本書においては、マルクスの階級というバンドラの箱を開けた途端、ありとあらゆる階級像が飛び出したという様相を呈している。ただ、プリズムを通して分化されるスペクトラムがいかに多様であろうとも、多様な階級像の中にも、「富や文化によって人間達が優劣の『類』（class: 階級の原義）に分類されてできた結果としてのカテゴリー化」という共通点がある。

こうして、階級論は認識論へと通じてゆく回路を内に蔵している（この点に関しては白川が「階級によって語る」と「階級について語る」という形で意識的に取り上げている）。また、ゲワーツとエリントンが階級分化を「存在論的差異化」（Gewartz and Errington [1999: 33]）として捉えたように、階級論は存在論へと導かれてゆく回路をも持っている。本書ではこうした哲学的思考圏へ踏み込むことは行わなかったが、階級論は哲学的位相を内に秘めているということは一言しておこう。第一、階級論の起点に立つマルクスその人が階級概念へと至り着く発条として哲学的疎外論から出発しているのだから。

## 本書の構成

第1章において、塩田は50年程前まで新石器的部族社会を生きていたパプアニューギニア高地のインボン族が資本主義的階級社会へと変容する様を、「人生ゲーム」という概念を鍵に、諸個人の交錯が織りなすフィールドでの相互作用の中から描き出した。すなわち、社会構造のレベルでの大転換が、個々の人生の前にはどのような形を取って現れるのかを追究したのである。

そのため、塩田はまず、パプアニューギニア全体の階級形成史を鳥瞰し、インボン族における階級発生の背景を素描した。その中から明らかになってきたのは、パプアニューギニア国家の国際的巨鉱山・エネルギー採掘資本に圧倒的に経済的に依存する体質と近代教育の階級発生に対する意味の大きさであった。ただし、面白いのは、大学などで高等教育を受けた高学歴エリートは政官界に入って、国際的巨鉱山・エネルギー資本に対する依存を行いつつ政治的統治階級となるのに対し、自立的ビジネス階級（自己の資本を生産・流通過程に投入し、自己の才覚で利潤のチャンスを発見して獲得してゆく階級）は中等教育プラスアルファ程度の教育を受けた層から集中して湧き起こってくるということである。つまり、学校秀才の知のあり方とは異なった知の形態がビジネスを興す企業家—資本家階級には必要だということである。そして、村人達から地理的にも社会的にも遠く離れた政治的統治階級に比して、ビジネス成功者階級はたとえ都市でビジネスを営んでいようとも、生まれた村に家を建て、村との接触を失わず、また、村落の中に住んで様々なビジネス活動に携わる者も多い。これまでは、村落間の儀礼的贈与交換を通じて、村の間の同盟関係を構築することに卓越することが、男達の人生ゲームの内容を成していたのに対し、ビジネス成功者階級は資本主義経済の中に自らの成功を賭けるという新たな人生ゲームに己の身を投じていったのである。そして、30代半ばにさしかかって人生ゲームの内容が変わったらしいということに気づきつつあるのがグラスルーツ（草の根）と現地で呼び慣わされて

いる敗者となりつつある階級である。インボング族においては、ここ十数年、年率5%というすさまじい人口爆発が起こり、グラスルーツ階級は土地不足と貧窮化に襲われつつある。そのため、彼らは自らの子女には学校教育を受けさせ、新たな人生ゲームに参加させようと必死になっている。このようにして、新石器の部族社会から資本主義的階級社会へという社会構造上の大転換は、個々人にとっては、人生ゲームの変換として捉えられているのである。

こうして、儀礼的贈与交換における卓越をめぐる競争から、ビジネス上での成功をめぐる競争へと、インボング族の競合的人生ゲームの内実は変わりつつある。

この様を、豊富なライフ・ヒストリーと人々の間のインタラクションを通じて描出し、人生ゲームの転換がインボング族の歴史の推転と階級の発生の起動力としていかに働いているのかを明らかにしようとしたのが、第1章である。

第2章の風間論文はキリバス共和国の離島タビテウエア・サウスの村落を対象としたもので、いわば世界システムの周辺に置かれている社会における階級論の可能性を検討している。風間の結論を先取りして言うならば、タビテウエア・サウスの村落には「中産階級」を形成するほど、「持つ者」は「持たざる者」から分断されているわけではなく、在地の価値や理念によって両者の経済格差は常に平準化される傾向にあり、階級の形成には至らなさと約することができよう。

キリバスの国家経済は風間によれば、歳入均衡化準備基金 (F: fund) の運用益、入漁料収入 (F: fish royalty)、経済援助 (A: aid)、官僚制 (B: bureaucracy) によって特徴づけられる。こうしたFFAB型の経済体制をとるキリバスにおいて、外部とのチャンネルは脆弱であるだけでなく、都市部と村落部の間にも官僚機構を通じた財の不均衡な配分が生じている。その意味で、キリバスの村落は完全に外部と断絶した自給自足経済を営むわけではないが、かといって世界システムの強力な搾取構造に組み込まれず、経済的には物資と資金のわずかな移入によって外部世界と結びついている。こうして、タビテウ

エア・サウスに住む人々にとって、物資が常態的に欠乏するという貧窮状況は個人や世帯の経済力に左右されるものではなく、国家レベルの政治経済の問題なのである。

この点を踏まえると、個人商店や共同経営商店の発生とはまさにこの物質的な窮状 (*kainano*) を契機として、それを解決し、乗り越えるための在地の対応とみなすことができるのだ。商店経営の詳細なケース・スタディを通じて、風間が強調するのは商店経営や貨幣による売買が在地の価値や理念、および贈与交換の論理によって読み替えられている点である。

タビテウエア・サウスには懇請 (*bubuti*) という、日常生活における物資の平準化を促す慣行が存在する。懇請などに見られる贈与交換の論理が社会集団に内在化し、平等性の支配を生み出している。従って、財の個人的な蓄積は妬みや羨望の対象であり、反社会的・反集团的と見なされ、最終的に掛売り (*taarau*) によって潰れてしまう。こうした社会において、集団が共同で商店を経営する形態をとることが最も理想的であるといえる。ただ、アバマコロ交易のように、掛売りが禁止される限りにおいてである。

こうした議論の流れの中で明らかになるのは、風間が明言するように、「貨幣が用いられているにせよ、市場交換の規則がそのまま移植されているわけではない。村落社会では、平等性や集団性といった在地の価値が卓越するなかで、贈与の領域が市場交換を凌駕している」ことである。このように、平等主義的な価値や理念、贈与の論理が支配するタビテウエア・サウスの村落状況において、貨幣は贈与の領域に取り込まれているために資本とはなりえず、また「持つ者」から「持たざる者」へと財が流れる在地の論理が経済格差の拡大を抑制し続けるのである。

風間が在地に目を向けたのとは対照的に、白川の関心は都市へと向かう。第3章の白川論文は従来、キージングやハウオフア、ゲワーツとエリントンの研究が既存の階級概念を用いてオセアニア島嶼社会の変化を対象化してきた点を反省的に踏まえて、「階級概念によって語る」前に、この概念をオセアニア諸社会に適用することの是非自体を問わねばならないという問題意識



に発している。そこで、白川はヴァヌアツ共和国の首都ポートヴィラに居住する9人の都市富裕者を事例に取り上げる。彼らの桁外れな収入は、なるほど、その保有する財——とりわけ、ポートヴィラの土地と家屋建設費、家財道具——によって如実に示される。そして、こうした財の消費そのものが彼らを庶民から浮き上がらせるディスタクシオン（卓越化）として機能している感さえ与える。しかしながら、彼らがゲワーツやエリントンが位置づけたような中流階級や中産階層というまとまりをもった「層」と捉えられるかどうか——これこそが白川の検討する枢要な問題なのだ。

白川論文において興味深いのは都市富裕者の生成と再生成の問題が詳細に論じられている点だ。対象となった9人の都市富裕者は現在——中には、かつて——国家公務員や病院勤務者、もしくは自営業者であり、この社会的地位によって莫大な現金収入をもたらしている。しかし、こうしたことを可能にさせる社会的地位に関して、彼らは決してめぐまれた社会経済的環境にあったとは言えないのである。実際には、彼らはすべてポートヴィラ以外の地方村落出身者であり、その地方の小学校に通うことから学歴をスタートさせても、あるいは父親が定職に就いていなくとも、子供達は公務員の職を得ることができたのである。

だが、それは1990年以前の話であり、現在となっては事情が一変する。事実、成り上がった9人の富裕者は子供がより高い社会的地位につくにあたり、教育水準の高い小学校から難関中等学校、そして大学へというルートが望ましい進路の一つと考えている。従って、彼らは自身の経済力を背景にして、子弟の教育に熱心に、かつ惜しみなく多くの金をつぎ込む。かくして、近年では安定した職業に就いている者の子弟たちが親と同じような職を得てゆくという構図がはっきりとした輪郭を帯びたものとして立ち現れてきているという。白川はこうした都市富裕者達の状況を「再生成の機制」という言葉で表現している。この意味において、白川は都市富裕者の再生成という世代の問題——時間軸——へ言及することで、今後の継続調査の課題を提起したと言える。

しかし、そういっておきながらも、すぐに都市富裕者「層」の生成として捉える見方は留保されることになる。なぜなら、社会的相互行為や自他の語りに関する考察は富裕者「層」が幻想であることをいともたやすく暴き立ててくれるからである。

「対象者たちが自分たちと同じような経済力や生活水準をもつ人々と中心的につきあうという傾向は、ことさらに見出すことができない」と白川が明言しているように、富裕者達にとって重要な社会的紐帯や付き合いはすべて親族や姻族、同郷者に限定され、彼らの故地との関係でさえも維持されている。また、自他に関する一般的な語りは自分の出身地、もしくは父母の出身地を地名に冠し、「マン+地名」という形を用いる。逆に、「人々が経済的な豊かさや貧しさ、学歴の高低などに基づく語彙や概念を用いて、自己を含む『我々』やそれ以外の『彼ら』について語る」ことはないという。以上の諸点を踏まえて、白川はポートヴィラの富裕者達は「実体」、ならびに「言説」両レヴェルにおいても、現段階では一つの社会的な「層」として実在しているとは言えないと結論づけるのである。

第4章の関根論文は太平洋島嶼国における階級論の中でも独自の位置づけを得ている。関根はブラックバーディングという過去の経験がフィジー社会におけるソロモン諸島系住民の現在の「周縁性」や「階級性」を説明するための要素となっている点に注目する。

そもそも、ブラックバーディングとは他地域から誘拐や奴隷狩りのような形でプランテーション労働者を調達・確保する行為をさす。フィジーにおいては、1860年代以降、西太平洋の島嶼地域からの出稼ぎが断続的に発生していた。とりわけ、ソロモン諸島民は1880年代以降、大量に流入してきた。現在、ソロモン諸島系住民がまとまって居住するスヴァ郊外の「ワイロク」居住区とは、こうしたソロモン諸島の労働移民を一カ所に集住させるという英国国教会の温情主義的計画によって形成されたものなのである。

ワイロク居住地区はソロモン諸島の出身地名に応じた5村で区切られ、構成されている。住民は耕作可能な地で自給自足的な生業で生計を立てている。

住民の約80%が無職もしくは臨時雇いであり、フィジー社会内において「学歴や技術のない低賃金労働者としての役割」を担ってきたし、現在でもそうである。英国国教会の庇護は結果的に、ワイロク住民を「貧困」「土地なしの社会的弱者」「低賃金労働者」のソロモン諸島系住民という否定的イメージとして固定化させたと言える。ブラックバーディングとはこうした窮状の根源であり、離散の契機として絶えず想起され続ける、終わらない問題として現存しているのだ。

特に興味深いのは、ワイロク住民がこうした自分達の状況をイスラエ尔的な彷徨やユダヤ人との連続性の中で捉えようとしている点である。ユダヤ人との連続性を主張する一連の試みは離散によって断ち切られた関係を回復しようとする幻想的なスペクタクルに似ている。ここで重要なのは、これらが真か偽かという問題ではなく、アイデンティティを模索し、明確にし、フィジー社会内での周辺的な現状を説明する原理と言説を与えているということなのだ。さらに、ブラックバーディングは不本意な離散を強いられた「事実」に対する賠償請求というラディカルな形をとって現代に蘇る。これらの言説自体が逆説的に、現在のソロモン系フィジー人が置かれた不利で周縁的な窮状、克服すべき「階級性」を浮き彫りにするというわけである。

関根の論調はきわめて民族-階級 (ethno-class) 的である。ここでの階級はフィジー社会という多民族的状況の中で生起する民族問題と不可分な両輪として認識されているからだ。これは何もフィジーに限った話ではない。第5章の柄木田論文でもマイクロネシア・ヤップ州で、この種の問題が扱われていることは興味深い。

ヤップ諸島の伝統的な社会秩序は、ヤップ本島と離島とのサウエイ朝貢関係に基づく階層制によって成り立っていた。しかし、近代化につれて、ヤップ本島にサービスや財が集中するにつれて、本・離島間の政治経済的な格差が増大した。柄木田は「離島の側」から時系列的に展開されるコミュニティ用地獲得戦略に目を向け、こうした社会経済変化に伴う伝統的な階層関係の動態を具体的に論じている。

柄木田が報告する三つの土地獲得の実践はすべてタモル会議と呼ばれる、離島の伝統的首長会議において公式に議論・裁可されている。ここでの決議は首長というよりも、離島出身の公務員の意見に依存する場合が多いので、タモル会議は州政府とコミュニティを媒介する役割を果たしていると言える。つまり、柄木田はタモル会議を離島民の総意を反映した「層」と捉えることで、ヤップ本島という「層」に対するポリティクスの問題へとスライドさせているのである。

まず、マドリッチ (Madrich) は首都コロニア周辺にあり、第二次世界大戦後は専ら離島住民の短期滞在用地として利用されてきた。土地保有者はこの1万9536.5平方フィートの土地を政府にリースしていたが、1999年に離島住民の居住地よりも他の用途へ転用するため、返還請求をした。それに対し、離島首長会議であるタモル会議は離島出身公務員によるリース料の集積を条件に暫定的なリース契約を結んだ。だが、同会議は新たな離島出身者のための土地を模索している。

ダバッチ (Dabach) はマドリッチと公務員宿舎の過密化に伴い、コロニアから幾分遠いトミルの土地に建設されたものである。その際、管財人には石貨と貝貨が贈与されたが、1989年には石貨が返還されると共に、土地は政府によって買収された。このダバッチの問題点は離島のエリートが多く居住していること、マドリッチ化を避けたため多くの居住者を受け入れていないことがある。そして、何よりも、政府所有であるため、住宅ローンのための担保とはならず、結果として、人々は単純不動産権 (Fee Simple) を模索する。

ガルゲイ (Gargey) はダバッチと同じくトミルの土地であるが、後者は「低位の土地」であったのに対し、ガルゲイは「高位の土地」であった。土地保有者はある建物を建築しようとしたが、建設会社が拒み、売りに出された。そこで、単純不動産権を模索するタモル会議が介入し、州政府に働きかけた。州政府は離島出身者 (タモル会議) が共同購入する条件でこれを購入した。だが、タモル会議による共同購入は破綻し、現段階では連邦政府によって買収されている。

以上、離島から本島に移住してきた移住民の土地に対する価値観の変容を念頭に置きつつ、三つの土地獲得戦略の実情を報告する中で、「離島の側」にとって本島の土地が貨幣に換算しうる価値を帯びているという点が本島・離島という伝統的な階層間のポリティクスと重ね合わされていることを明らかにした。つまり、単純不動産権をめぐる「離島側」の「ヤップ本島側」に対する闘争という形で具現するのである。だが、そうであってもなお、柄木田は土地の商品化の進行・浸透が本島と離島の階層関係を必然的には「階級関係」へと変換しないという。なぜなら、一見経済的な「層」と映る離島民の実践——貨幣の集積——はきわめて伝統的な贈与関係に依存しており、「階級」に回収されきれぬ伝統の論理が全面的に押し出されてしまうからである。

口頭伝承によるプレ・コンタクト時代の再構成に基づいて、ポリネシア・トンガの階級を歴史人類学の手法で論じたのが第6章の大谷論文である。言い換えれば、大谷は西洋との接触を契機とした国家建設の過程に目を向けることで、トンガの階級形成を歴史的に跡づけるのである。

まず、理論的な枠組みとして、階級と階層を区別することから着手する。階級とは生産関係の地位的差異と生産手段の支配的占有の指標によって、いわばマルクス主義的に定義される。一方の階層 (stratum) は従来アメリカで主に論じられてきた成層と同じ用法で使われている。大谷によれば、プレ・コンタクト時代は他のポリネシア社会と同様に、トンガは成層社会であった。だが、カインガにおける再分配の遵守や首長が平民の懇請に応えねばならないなど、首長の権力の行使には親族原理によって一定の制限が課せられていた。つまり、平民と首長の関係は決して階級ではなく、政治統治形態は親族原理を超えるものではなかったという。現在のようなトンガの階級社会が成形されたのは国家建設、より具体的に言えば立憲君主国家の成立を通じてであった。

トンガ最初の成文法は1839年にタウファアハウ (後のジョージ1世) がヴァヴァウ島のフォノ (政治集会) で提示したヴァヴァウ・コードである。これは当時のキリスト教宣教師による18世紀イギリスの社会・政治秩序のモデル

(Landlordism) を反映したものであった。このモデルはかつての親族原理に基づく首長と平民の関係を、一方に大地主、もう一方に大地主に従属する農民を配置する階級関係へと移行させた点できわめて重要なエポック・メイキングであった。

長い近代国家形成の過程は、権力の集中化と階級関係の確立を押し進めていった。とりわけ、1875年に公布されたトンガ憲法は人民の平等と自由を謳っておきながら、貴族の存在について規定している。この貴族は首長の中から国王に任命され、国会議員となり、憲法に規定された定数しか存在しない。しかも、相続人は世襲的に貴族となり、世襲領地 (tofia) も交付された。一方、平民はこの貴族の土地に借地料を支払い、アピ・ウタ (耕作地) として使用し、収穫物やサービスを領主である貴族に奉納せねばならなかった。1880年には憲法補遺が追加され、アピ・ウタは租税地として世襲化され、平民の土地使用権が法によって保障された。だが、逆に、貴族の経済的基盤を安定化させ、階級関係の強化に作用したと解釈されうる。1890年代以降は国家権力の強化と共に、王の直轄地や貴族所有地、政府所有地の区分が画定した。

このように、トンガの階級生成とは立憲君主政体の確立に伴って、首長と平民の関係が法を媒介にした地主—借地人の階級関係へと再編成されていくプロセスであったのだ。

しかし、独立後のトンガにおいては、他の島嶼諸国と同様、近代的高等教育を受けた民衆出身の民衆教育エリートが官僚・知識人層として台頭し、伝統的な領主・農民関係の中間に「中間階級」とでも呼ぶべき階級が出現した。大谷は彼らこそが、伝統的階級構造を変革してゆく中核となる集団であると予測している。

[注] \_\_\_\_\_

- (1) ちなみに、ゲワーツ・エリントンはその「階級」概念をマックス・ウェーバーに依拠しているというが、ウェーバーの階級概念はむしろマルクス主義的な経済システムへの関与の仕方が同一であるような集団として定義されるので、これは明らかにウェーバーの誤読である (ヴェーバー [1954: 14-150])。

- (2) 彼女らの記述には下級公務員や事務員や店員といったエリートでも、グラスルーツでもない、彼女らの言うところの下層中流階級=「シュー・ソック」マン (Gewertz and Errington [1999: 93]) もほとんど現れてこない。

### 〔参考文献〕

#### 〈日本語文献〉

- ヴェーバー, マックス (浜島朗訳) [1954] 『権力と支配』みすず書房。  
 ヴェブレン, ソースティン (高哲男訳) [1998] 『有閑階級の理論』ちくま書店。  
 ウォーラースティン, イマニュエル (日南田静真監訳) [1987] 『資本主義世界経済 (I・II)』名古屋大学出版会。  
 佐藤幸男 [1997] 「近代世界システムと島嶼国・地域の問題群—マイクロステートのポリティカル・エコノミー—」(塩田光喜編『海洋島嶼国家の原像と変貌』アジア経済研究所)。  
 サーリンズ, マーシャル (山内昶訳) [1984] 『石器時代の経済学』法政大学出版会。  
 塩田光喜 [2002] 「危機に立つパプアニューギニアと21世紀の展望」(*South Pacific*, No.249)。  
 ブルースト, マルセル (井上究一郎訳) [1984-89] 『失われた時を求めて』筑摩書房。  
 ブルデュエ, ピエール (石井洋二郎訳) [1990] 『ディスタンクシオン (I・II)』藤原書店。  
 —— (今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳) [1988] 『実践感覚 (1・2)』みすず書房。  
 ホイジンガ, ヨハン (高橋英夫訳) [1973] 『ホモ・ルーデンス』中央公論社。  
 マルクス, カール (向坂逸郎訳) [1969] 『資本論 (一)』岩波書店。  
 —— (村田陽一訳) [1971] 『ルイ・ボナバルトのブリュメール一八日』大月書店。  
 マルクス, カール=フリードリヒ・エンゲルス (大内兵衛・向坂逸郎訳) [1951] 『共産党宣言』岩波書店。  
 モーガン, ルイス・ヘンリー (青山道夫訳) [1958] 『古代社会』岩波書店。

#### 〈外国語文献〉

- Bertram, G. and R. F. Watters [1985] “The MIRAB Economy in the South Pacific,” *Pacific Viewpoint*, 26(3).  
 Firth, Raymond [1950] *Primitive Polynesian Economy*, New York: Humanities Press.  
 Gewartz, D. and K. Errington [1999] *Emerging Class in Papua New Guinea: The Telling of Difference*, Cambridge: Cambridge University Press.  
 Goldman, Irving [1957] “Variations in Polynesian Social Organization,” *Journal of*

*Polynesian Society*, 66.

- Hau'ofa, E. [1987] "The New South Pacific Society: Integration and Independence," A. Hooper et al. eds., *Class and Culture in the South Pacific*, Suva: University of South Pacific.
- Keesing, R. M. [1996] "Class, Culture, Custom," J. Freedman and J. G. Carrier eds., *Melanesian Modernities*, Lund: Lund University Press.
- Robertson, R. T. and Akosita Tamanisau [1988] *Fiji: Shattered Coups*, Leichhardt: Pluto Press.
- Sahlins, Marshall [1958] *Social Stratification in Polynesia* (American Ethnological Society Monograph), Seattle: University of Washington Press.